

医学科長就任のご挨拶

— Next Stageへ —

琉球大学大学院医学研究科分子解剖学講座 教授 高山千利



4月1日付で、図らずも医学科長に就任した高山です。平成19年に琉球大学に異動し、9年目に入りました。2年目には厚生委員長になり、足掛け3期。引き続き教務委員長、医学教育企画室長に就任し、継続して学務に関連する仕事を

続けてきました。今回、医学科長を拝命し、教育活動を総まとめする立場になりました。

現在、文部科学省は、大学改革推進プランを強力に推し進めています。全国の大学、特に地方の国立大学は、生き残りをかけて自己改革を強いられています。琉球大学も負けてはられません。我々の医学科は、2年余りにミッションの再定義を行いました。「地域完結型医療構築のための島嶼循環型の医師派遣」と「沖縄の地域特異性を生かした先端的医学研究」を2本の柱としています。現在、その実施推進期間にあたり、目に見える形で成果をあげられるよう努力しています。

私が主に担当するのは、医師及び医学者養成に関するパートです。この部分で、文部科学省は2つの点で改革を求めています。1つは、いわゆる“使える医師”の育成です。これは、いわゆる『2023年問題』、『国際認証問題』とも密接に関連しています。『2023年問題』をおさらいしますと、「ECFMG認定（米国医師国家試験など）に応募する医師は、2023年より、認証評価を受けた医学部を卒業していることが求められる。この条件を満たすには、卒業大学が米国LCMEなどの世界医学教育連盟（WFME）が認めた基準を用いた公式なプロセスによって認証評価されていなければならない。」という、2010年米国ECFMGの発表のことです。従来の講義中心、知識獲得を主眼とする学部教育を見直し、体験・実習を通じて、技術・技能を獲得するカリキュラムに改める必要があります。一昨年よりワーキンググループを立ち上げ、カリキュラムの全面改訂を進めています。(1) 1コマ60分、1日6時間、(2) 1年次からの専門科目、(3) 座学を大幅削減、(4) 実習・体験に関するプログラムの充実、(5) 各学年で

患者と接する機会を増やす、(6) 参加型臨床実習の充実、などです。また、国家試験対策にも力を入れ、国家試験に準じた総合試験を5年次と6年次で実施し、2年連続で、新卒合格率95%以上を達成することができました。

2つ目は、研究者マインドを持った医師の養成です。医学生・初期研修医は専門医志向が非常に強く、ほとんどの大学で、学位取得者の減少、若手基礎研究医不足に悩まされています。琉球大学の場合は特に深刻です。多忙を極める臨床現場、空きポストが少ない基礎系講座の現状を考えると、厳しいと言わざるを得ません。しかしながら、その中であって、いくつかの取り組みを始めております。3年次後半での3か月間の研究室配属（基礎、臨床両方）を組み込みました。この間、学生の強い希望がある場合には、国内外のアクティブな研究室での実習も認める方向で準備を進めています。さらに、1年次からの研究室入りも推奨しており、5つ程度の講座には常時医学生が来ています。

加えて、学部教育にもグローバル化を進め、国際交流にも力を入れています。現在、米国（ハワイ大学、ミシガン州立大学）、タイ（タマサート大学）、台湾（台北医学大学）と提携を結び、各大学毎年2名ずつ派遣と受け入れを行っています。さらに、毎年10名程度の医学生が海外から実習に本学を訪れております。これらを通じてグローバルな世界で活躍できる人材の育成にも力を入れていきたいと考えています。

西普天間住宅地区への移転、国際医療拠点形成という、明るいニュースもあります。琉球大学医学部医学科として、しっかりとした成果をあげて、国民、沖縄県民の期待に応えたいと思います。医学科長として、これまで進めてきた医学教育の充実化、そして国際化をさらに、進めていきたいと考えておりますので引き続きご指導ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。

ECFMG : Educational Council on Foreign Medical Graduates

LCME : Liaison Committee on Medical Education

WFME : World Federation for Medical Education